

幕が下りてから 2.

2020 年 7 月 30 日

浅沼 信爾

### コートジボワールの「二色海岸」

今年 5 月にアメリカで警官によるジョージ・フロイド殺害事件がおきて、アメリカの各地でブラック・ライヴズ・マター運動が起こった。人種差別を断罪するほとんど自然発生的な運動だ。

改めて人種差別の問題を突きつけられて、わたくしが勝手に「二色海岸」と呼んでいるコートジボワールのビーチを思い出した。

1970 年代末にわたくしはガーナ政府の仕事をしていて、ガーナを何度も訪れている。ガーナでの滞在は数週間に及ぶことがあったが、食料品等の日常生活必需品が全くなく（ホテルではコーヒーさえ飲めなかった）、それに外部との電話やテレックス連絡もほとんど不可能という状況を逃れて週末にコートジボワールの首都アビジャンに息抜きに行ったこともある。そんなアビジャンにフランス人の同僚の知り合いがいて、ある日曜をこの家族とビーチでバーベキューをして過ごそうと誘われて出かけたのがこのビーチだ。

アビジャン市街から南にギニー湾に面する海岸まで出て、そこからさらに A100 号ハイウェイを西に数キロも行くと、昔のこの地方の王国の名前をとったバッサム・ビーチがある。実はわたくしはこのビーチにまつわる悲しい出来事を覚えていた。コートジボワールは 1960 年にフランスから独立を果たしたが、1960 年代から 1970 年代にかけてその立役者フェリックス・ウフェ＝ボワニ大統領の下で、経済は「イボワールの奇跡」と呼ばれる高度成長を遂げていた。世界銀行はアビジャンに開発プロジェクト形成を手助けする事務所を設けていて、わたくしの若いフランス人の同僚がその専任職員として派遣されたときには、われわれ仲間の垂涎の的になったものだ。

彼には昔肺結核の経験のあるフランス人の妻がいて、二人でアビジャンに赴任し、ある週末にこのビーチに遊びに来たらしい。ところが彼が日影で読書中に目を上げると、彼女が沖合を西に流されてゆくのが見える。驚いて海岸にたむろしていた数人の現地人にすぐに船を出して救助して欲しいと懇願した。対価に

5,000CFA フラン（ほぼ 5,000 円）を要求されて、カネはもちろん出すからすぐ救助に行ってくれと言って舟を送り出したまでは良かったのだが、どうも舟を漕いでいるうちに現地人の仲間内で 5,000CFA フランでは安い、10,000CFA フランは欲しい、もう一度戻って値段の再交渉をしようということになったらしい。帰って来た舟に、ミシェルはカネはいくらでも払うから即刻彼女を救助しろと怒鳴るように頼んだが、その間にクロードは沖合で溺れてしまった。当時わたくしはこの話を聞いて、ミシエルの途上国開発の情熱は打ち砕かれたに違いないと思った。しかし、後で知ったのだが、ミシエルはこの打撃から立ち直り 1990 年代に世銀を停年退職するまでアフリカの開発に彼のプロフェッショナル・ライフのすべてを捧げてきた。

こんな因果めいたバッサム・ビーチでわたくしが見たのは、奇妙な光景だった。実に美しいビーチで、防風林をぬけて砂地に入った所にはヤシの葉葺きのビーチハウスが並んで、バーベキューの煙がたち上っている。しかし、そこに居るのは白人だけ、しかも時代を反映して女性はローティーンの少女から 60 歳代の女性まで全てトップレス、そして多くのストリング・ビキニといういでたちを見ると、そこがアフリカのビーチであることを忘れて、地中海沿いのサントロペみたいなビーチに居るような錯覚を覚える。この当時のコートジボワールの経済は、実は多数のフランス人の技術者やマネジャー、それに教師や医師に支えられて運営されており、コートジボワールに在住するフランス人の数はフランスの植民地時代をはるかに超えるものだったと言われている。それはウフェ＝ボワニ大統領の方針によるものだった。だから、多数のフランス人が週末に海岸にやってくるのは不思議でもなんでもなかった。

不思議だったのは、元宗主国フランスの影響力は強く残っているにしても独立後 20 年近くたっていて、現地のアイボリアンの姿が皆無なことだ。インドネシアやフィリピンの海岸に行けば、それこそ人種のレインボー状態のカラフルな光景が見られるのに。バッサム・ビーチのわれわれの小屋から東に歩いてゆくと川が海に流れ込んでいるところがある。そしてそれを境に今度はアイボリアンだけのビーチが広がっている。ここでは服装もトップレスビキニのような地中海色は皆無で、肌の露出を最小限に抑え、かつあちこちにフリルのついたスイムスーツが女性海水浴の標準衣装になる。そして、フランス人の姿はパタッと消えてしまう。小川を渡っただけでまるで異国に来たようだった。

極彩色の人種差別の光景で思い出すのは、ノーベル経済学賞を受賞したポール・クルーグマンがうんと昔に書いたアメリカの住宅地における人種構成に関する

論文だ（この論文の載っていた書籍・資料は既に始末してしまったので、今サーチをしても出典がはっきりしない）。その論文ではクルーグマン流の簡潔な理論モデルが提示されている。前提として、まず同数の白人と黒人家庭があって、皆郊外の新しい団地に入ることを希望している。もともとインテグレートされた団地を計画しているわけだが、住民の意向も考慮することとして、白人家庭あるいは黒人家庭の間での孤立を避けるために、向こう三軒両隣の5軒のうち大多数以上一すなわち3軒以上が自分たちと同じ人種であれば受け入れるという仮定を設ける。こうして希望者を募ると、当然最初は白人・黒人家庭がミックスした、インテグレートされた団地が出現する。しかし、その後団地から抜ける人が出てくる。同じ条件を課して希望者を募っても、何回か参入・退出を繰り返すうちに、この団地は白人地区と黒人地区にきれいに分離してしまう。これがこの小気味よいモデルの結論だ。

住民が100%カラーブラインド（人種差別感なし）ではなく、やはり多数の仲間が周りにいる方が良いと思って行動すると最終的に人種差別的な団地が出現するのは、直感的に理解し易い。クルーグマン理論の団地でも、またコートジボワールの「二色海岸」の場合でも、人種差別的な法的規制がない場合でも、人々の志向や行動様式に多少の差別感があると、社会的差別現象が起こるのだ。

コートダジュールの独立直後のバッサム・ビーチも仮想の「クルーグマン団地」も初期状態では白色と黒色が適当に混じり合った灰色だったに違いない。しかし、時間経過とともに退出・参入がくりかえされ、だんだんと白色と黒色が濃くなる部分が増えて行き、究極的には白と黒の二色の地区に二分されてしまう。今日存在するロスアンジェルスの子イナタウン、ニューヨークのハーレム、パリのバンリュウ、ワシントン DC 郊外のリトル・サイゴン等々もすべて基本的にはクルーグマン理論が示すプロセスを経て出来上がったのではなかろうか。

ブラック・ライヴズ・マター運動が多発するアメリカには、奴隷制が廃止された1866年以降も南部諸州ではいわゆるジム・クロウ法（Jim Crow laws）と呼ばれる「分離すれども平等（separate but equal）」という判例法理に基づく人種差別制度が存在した。それが撤廃されたのは1964年にリンドン・ジョンソン政権が公民権法（Civil Rights Act）を成立させてからで、それからは法律の下では人種差別は存在しないことになっていた。しかし、法規制の枠外の社会的行動になると別問題で、わたくし自身1960年代後半にワシントン DC に隣接するメリーランド州ベセスダのケンウッドと呼ばれる地域で住宅を探していた時に、申し訳なさそうな顔をした不動産仲介業者に「ユダヤ人あるいは有色人種の個人

に売却しないこと」という項目が入った住宅売買契約書のひな型を見せられたことがある。<sup>1</sup>

居住地区がそれぞれ違って、その上に所得格差が存在すると、それは所得格差だけに留まらず、年若い世代の教育格差に繋がり、最終的には社会的、文化的、知的な能力ギャップが顕著になって、差別と格差が社会構造に組み込まれてします。<sup>2</sup> このような社会構造に内在する格差が、住民の選好、価値観、志向、偏見等々（どんな言葉を使っても良いが）から始まった場合には、法制度的なあるいは公共サービスの上での差別の撤廃だけでは不十分で、よりきめ細かい公共政策が必要とされる。さらにまた、それだけでも駄目で社会全体が参加する啓蒙運動を含んだ社会運動が必要だ。そしてその社会運動を支援する公共政策も必要になる。

現在世界の大多数の国は多民族国家の側面を持っている。日本のように純粋に近い民族国家の場合でもそうだ。グローバリゼーションの進展とともに移民は増えてゆかざるを得ないから、人種差別問題を対岸の火事として傍観するわけにはいかない。

過去半世紀ばかりの間に、世界は経済的に明らかに豊かになっている。それにもかかわらず、われわれの住む社会が幸福な社会だとは思えない。あらゆる差別や被差別が強く意識され、あらゆる格差が社会に現れている。新型コロナウイルス危機は、それを醜い形で露出した。どの国でもたぶん今一番必要なのは、分断されつつある社会を今一度連帯に向かわせるような新しい社会契約（ソーシャル・コントラクト）を作ること、そしてそれにもとづいた新福祉国家の像を描く努力ではなかろうか。それはたぶん簡単なことではないだろう。しかし、ヨハネの黙示録の四騎士が現す人類に対する脅威のうち、戦争と貧困と疫病を克服しつつある人類が、自滅しないで「人新世（Anthropocene）」を生き抜くためにも、そ

---

<sup>1</sup> ワシントンの桜は、ワシントン DC 中心部にあるタイダル・ベイズンの桜並木が有名だが、その次に有名なのがメリーランド州ベセスダのケンウッドの桜並木だ。ケンウッドは長い間ユダヤ人を受け入れなかったので、地域のユダヤ人不動産業者がケンウッドの隣接地にケンウッド・パークと呼ばれるインテグレートされた住宅地を開発した。わたくしは、1980年代前半にここの住宅を購入して数年過ごしたことがある。美しい多人種混合住宅地だった。

<sup>2</sup> このことを広範なインタビューとあらゆるサーベイ・データを駆使して詳細に描き出したのが、Robert d. Putnam, *Our Kids: The American Dream in Crisis*, 2015, New York: Simon & Schuster（ロバート・D・パットナム著、柴内康文訳『われらの子ども：米国における機会格差の拡大』、2017年、創元社）だ。

の努力を避けては通れないと思う。<sup>3</sup>

わたくしが思い出したバッサム・ビーチは、もう 40 年以上昔の話だ。もう一度あの「二色海岸」を訪れる機会はわたくしにはないだろうが、あれからどんな変化、進化、進歩があったかぜひ知りたいと思う。

---

<sup>3</sup> 人新世(Anthropocene)とは何かについては、Yubal Noah Harari, *Homo Deus: A Brief History of Tomorrow*, 2016, London: Penguin Random House UK (ユバル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳『ホモ・デウス：テクノロジーとサピエンスの未来 (上・下)』、2018年、河出書房新社)。ハラリは、「人類は過去数十年の間に、飢饉、疫病そして戦争を抑え込むことに成功した (Most people rarely think about it, but in the last few decades we have managed to rein in famine, plague and war.)」と述べている (第1章：「人類の新しい課題」)。